蘇る戦争の亡霊

武者丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蘇る戦争の亡霊

【Ｎコード】
Ｎ７３３０Ｙ

【作者名】
武者丸

【あらすじ】
インフィニットストラトス。その兵器の登場により世界は急速に女尊男卑の歪んだ世界になってしまった。だが、そんな世の中を、そして何よりＩＳとその開発者を誰よりも怨む男が居た。故に彼は、否彼等は立ち上がる。
罰を与えるその為に。

※この作品はかなり原作アンチ要素が強いです。また、作者は可愛い女の子を書けないのでハーレムどころか恋愛も期待しないで下さ

い。

プロローグ（前書き）

処女作になります。若輩者でありますがよろしくお願いいたします。
かなり不定期な更新になると思われますのでご了承頂きたく願います。

プロローグ

ＩＳ～インフィニット・ストラトス～。六年前に開発されたそれにより、世界情勢は一変してしまった。
現行兵器を超えた圧倒的な戦闘力を持つそれは女性にしか扱えるものではなく、僅か４百余りの機体しかないのにも係わらず、「男女が戦争したら三日も持たず男が負ける」と言われるまでになってしまった。
世に言う女尊男卑の始まりである。
　だが、果たしてそうなのだろか？戦争とはそのような単純なものなのであろうか？
かつて戦争を経験した者達は疑問を抱く。
もはや戦後という言葉も消えかけている中で、生き残った彼等は思う。
「そんな短期間で済むものであったら、どれほど良かったものか」
多くの咎人を生み、禁忌へと触れる行為があっけないほど平然と行われたあの地獄はそんな単純なものである筈がないと彼等は語る。
そして思うのだ。人に其処までの驕りを生ませるものがこの世にあって良いものなのかと。生まれてはならないものではなかったのかと。存在そのものが罪なのではないかと。

ーーーーそして「罪」には必ず「罰」が与えられるべきではないかとーーーーーーーーー

そう、罪は必ず罰されなければならない。そして彼等の想いを代弁するかのごとく怒りの拳は振り上げられる。地獄の底から蘇った戦争の亡霊と、彼と同じ名をした少年の血族によって……。

第一話　蘇る不死身の兵士（前書き）

次の話から一旦過去に戻ります。
なのでこの戦いの続きは後程という事になります。

第一話　蘇る不死身の兵士

「四基だけではありませんのよ！」
ードガガガガッ！！ー
不意打ちで撃たれたミサイルが一夏を襲う。慌てて回避行動を取るがまるで獲物を狙う蛇のごとく執拗に追いすがるミサイルを初心者の一夏が振りきれる筈もない。
着弾。全てのミサイルが牙を振るい爆煙が辺り一面を覆い隠す。その光景に誰もがセシリアの勝利を確信した。ーーー唯一人を除いて。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者めが」

彼女、織斑千冬の言葉が終わると同時に煙が晴れる。其処には今までとは全く違う純白の一夏の姿があった。
「まさか・・・一次移行！？貴方、今まで初期設定の機体で戦っていたっていうの！？」

驚愕するセシリア。いや、彼女だけではない。アリーナの全員が驚いている。だが一夏はそれには反応しない。俯いたまま、否、まるでこみ上げる何かを堪えるかのように肩が震えている。
　それを見た箒に悪寒が走った。あれは、あの時の彼だと。この一週間の特訓の最後の日、彼と最後に試合する前なにげなくーーそう、少なくとも彼女にとっては本当に何気なくーー聞かれた質問に答えた後の彼と同じだと。

「……ああ、ここからが本当の戦いだ……」

意外なほど静かな声で一夏が呟く。その言葉と同時に手にしていたブレードが展開される。

雪片弐型　自らのシールドエネルギーを消費する代わりに相手のシールドを切り裂く諸刃の剣

次の瞬間にはそれを片手に突っ込んで行くと誰もが考えた瞬間

ーーミシリ！！ーー

鈍く、不快な音が辺りに木霊した。その音にセシリアは何の音かと怪訝に思うが、音の後に目に飛び込んで来た光景に我が目を疑った。何故なら猪突猛進に突っ込むものと思われた一夏は未だに静かに立ち、その右手に握られていた雪片弐型の柄が彼の手の中でーー粉々に砕けていたのだからーー

「あ…貴方一体何を考えてますの！？自分で武器を壊すなん…いえ、そもそも如何して破壊できるので　すか！？」

セシリアの反応は最もだろう。初期設定で戦っていたというだけでも驚愕なのにせっかく手に入った武器を自らの手で破壊したのだ。それも素手で。

確かにＩＳにパワーアシスト機能は存在する為常人よりも優れた膂力を発揮できる。だが少なくともそれに使われる以上、武器もまた頑強に作られている。一夏がした事は言わば生身で真剣の柄を握り潰したようなもの。彼女の驚愕も無理も無い。その問いにようやく一夏は顔を上げる。だがそれを目にしたセシリアは恐怖した。いや、彼女だけではない。箒も、アリーナの女生徒も、そして肉親でありかつてブリュンヒルデと恐れられた千冬までが恐怖に震え上がった。何故なら其処にあるのはついさっきまで戦っていた戦闘初心者の頼りない顔ではなく

「言っただろう……本当の戦いはこれからだと、そう、茶番劇は終わりだと！！」

ーーまるで逆鱗に触れられた龍の如く、激しい怒りの炎を瞳に燈し、地獄の鬼もかくやと言うほどの恐ろしい表情をした顔があったのだからーー

「セシリア・オルコット。俺はお前に言った筈だ…専用機乗りってのはそんなに偉いのかと。」

「な……貴方今更何を言ってい「ガシィ！」！？何をしてますの！？」

一夏の言葉に自尊心を刺激されたセシリアは思わず、恐怖も忘れて反論するがその言葉を遮るように更に驚愕すべき行動を彼はする。自分…白式の背後に手を回し、ＩＳの心臓部そのものであるコアのある部分に先ほど恐ろしい握力を見せ付けた手を乗せ、否、掴んでいる。既に手の周囲を中心に亀裂が広がっておりミシミシと金属の軋む不快な音が辺りに響く。まるで白式の悲鳴のように

・・・

「言っただろ・・・専用機乗り如きがそんなに偉いのかと！！」

ーメリメリッ！グシャア！！ー

その言葉と同時に装甲が割け、中から黒い球状のモノ…コアが掴みだされる。それと同時に一夏、否、白式が力を失い落下してゆく。

「勝者、セシリア・オルコット」

百式のエネルギーが無くなった事を感知し、無機質な合成音声が彼女の勝利をつげる。

だが、それは、

「「一夏！？」」

「キャアアアッ！！！？？？」

「織斑君が死んじゃう！！？」
女達の悲鳴に遮られ誰にも届く事がなかった。無理もない。ちょっとした高層ビル並みの高さから人が自由落下ーしかも機能停止して鉄屑同然のＩＳを纏ったー
してくるのだ。数瞬後に地面に広がるであろう血と肉の花、ミンチになった死体を想像し誰もがパニックに陥る。
だが
「ハァッ・・・・タァ！！！」
「「「「え・・・・？」」」」
裂迫の気合とともに白式が脱ぎ捨てられる。いや、それだけではない見れば何時の間にしていたのか彼の両手両足にパワーリストとアンクル、更にはご丁寧にパワーチェストまでがつけてあったのだ。
それ等を素早く取り外すと地面に向かって周りに飛び散る白式のパーツに向かって拳を振るっていく。その度にまるでガラス細工の様にパーツが粉々になっていく。
ードゴオ！！バキン！グシャア！！ーそのたびに耳障りな破壊音が辺りに響く。正に白式の正真正銘の断末魔の叫びが辺りに響く。
余りの光景に誰もが目を疑う中
ードドゴン！ドドゴン！！ドッゴオオン！！！ドゴゴゴゴ！！！！ー
「キャアア！？」

凄まじい轟音とともにアリーナに激しい揺れが襲い掛かる。この上大地震でもおこったのかと皆が恐怖する中ゆっくりと揺れは沈静化して行く。その事に安堵し始めている中、ふとある女生徒がグランドを見て震え出し、それを心配した友人が駆け寄る。

「ちょっと、大丈夫？」
「あ……あ…アレ……！！見て！！！」
「アレってな…！？」

彼女の震える指先の先を見れば幾つもの巨大なクレーターが地面を抉っている。そしてその一つの中心に小さく見えるものを見たとき、彼女もまた恐怖に震えた。
　あれはパワーリストだ。今落ちている彼がつけていたものだ。ＩＳのパワーアシストシステムとはいえあんな馬鹿でかいクレータを作るようなものをつけてホイホイ動かせる筈がない。いや、そもそも彼は何時からつけていた？態々決戦にそんなものをつけて行く筈がない。ならば考えられるのは普段…！？

「化物…化物だわ千冬様の弟にしたって限度があるわよ！？」
「というか本当に人間なの？！サイボーグだって言われた方が納得できるわ「ドリャァァァ！！」　！？」

突如響いた咆哮に目を向ければ一夏が丁度最後のパーツー羽根のある胴体部分ーに蹴りを入れながらグラウンドに落下してきた所であった。再び轟音と共に大地が震えその衝撃に必死に耐える。やがて振動が収まった時、グラウンドには巨大なクレータができており、その中心には白式の残骸を踏み付け仁王立ちし、遥か上空のセシリアを睨み上げる一夏の姿があった。
「セシリア・オルコット」
「ッ！！？な…んで…すの…？」
言葉尻が、いや全身から震えが収まらない。第三者が見ても今までの行いは常軌を逸し過ぎているのだ
当事者の恐怖は押して測るべきであろう。むしろ口を利けただけでも僥倖と言うべきか。
そんな彼女を尻目に一夏はゆっくりと右腕をあげ、その手に握ったコアを掲げる。
「お前は言ったな。俺をＩＳの事を知らぬ素人だと。ならばお前は知っているか。ＩＳのコア、その正式名称を。そして知っているの

か？ＩＳのコアを増やせない本当の理由を！」

「コアの…正式名称…？増やせない理由なら開発者の束博士がコアの開発を拒んだからではありませんの…？」

「そうだろう。お前は、いやお前達ＩＳ乗りは何も知らない。何も見えてない。

白騎士事件の真相も疑わずにその力に魅せられ、圧倒的力で全てをねじ伏せられると。だがな。戦争ってのはそんな簡単なものじゃない。お爺ちゃんによく聞かされたよ。爺ちゃんは戦争に行ってはいない。だが爺ちゃんの兄弟は戦争の名の下に生まれ、その罪を一心に背負い二度死んだ。爺ちゃんだけじゃない。戦争で地獄を見たのはどこだって同じだ。だから爺ちゃんは誓った。もう二度と戦争を起してはならないと。この荒涼とした命のない大地を広げてはならぬと。そして平和になった世の中で兄弟に三度目の命を与え、今度こそ胸を張って平和の為に生きていこうと。

その為に爺ちゃんは研究を始めた。兄弟を蘇らせる為、そして父が夢見た新エネルギーを別の形で生み出し平和利用する為の研究、太陽エンジンの開発を」

「太陽…エンジン？」

「ああ、太陽光発電の様に太陽から無限のエネルギーを得るシステムだ。

兄弟にはバギュームって新元素を使った動力システムがあった。でも、ソイツは太陽爆弾と呼ばれる爆発すれば地球を死の星にする最終兵器でな。そんなものを兄弟にまたつける訳には行かなかった。それにバギュームにしても掘りつくして既にない。もし無公害なエネルギーを見つけても、掘りつくしたバギュームの様に簡単に枯渇させては意味が無い。そこで爺ちゃんはふと気が付いた。太陽爆弾

…その中にある太陽の文字に。生命と力の象徴。この太陽系で最も強大無比力を持ち、少なくとも後数十億年は力を溢れさせているそれこそが、正にうってつけではないかと。
そして爺ちゃんは研究を始めた。もう二度と兄弟に地獄を見せない願いを込め、その動力源に太陽エンジンと名をつけて」

「ですがそんな無限のエネルギーなど夢物語も良いところですわ！」

「その通りさ。だが爺ちゃんはそれを諦めなかった。やがて結婚し子を授かると子供は誰に強制されるでもなく、その研究を手伝いだした。その夢に惹かれて。やがてその子供も成長し孫が生まれる頃になり、やっと予定より低出力とはいえ、かなりの出力を持った試作型が誕生した。一先ずはそれを先行型として量産する事にした。小型で超出力、無公害のそれは丁度世で騒がれている環境問題対策にうってつけだと。自分達が作ったものが平和の為に役立つのだとだが、そんな願いをあざ笑うかのようにその試作型は盗まれた。ご丁寧にふざけた制限設定をつけられ、爺ちゃん達が最も嫌った戦争の道具として！！」

「盗まれた？試作品が？一体なにを…！？あ、貴方それは本気で言ってますの！？」

一夏の言わんとする事に気づいたセシリアは驚愕した。何故なら一夏の言わんとしていることは

「そう、その通り。ＩＳの根幹たるコア技術の開発者は束なんて兎女じゃない。真の開発者は・・・」

ＩＳという兵器の大前提を覆す

「我が祖父金田正太郎と、その息子夫婦・・・俺の両親だ！！だからアイツはコアを作らない、いや作れない！アイツはシステムを…ソフトを弄るのは確かに天才。だからコアの設定を弄くっただけだ。ハードであるコアの製造は不可能！！」

衝撃の事実なのだから。

「白騎士事件。あのせいでせっかく完成した量産太陽エンジンは散り散りになった。いやそれどころか平和を願って作られたのに、それとは最もかけ離れた戦争の道具にされ、あまつさえ女にしか扱えないというふざけた設定の性で女尊男卑という歪んだ世界を生み出してしまった。

……今でも目に焼きついてるよ。ひい爺ちゃんと兄弟の名を叫びながら悔し涙を流し、詫びる爺ちゃんと、茫然自失となった両親を。自分達に幼いながらも協力してくれたと思った少女に裏切られ、自分達が大罪を犯してしまったのだと後悔してる様を」

もはや今日何度目と数え切れない驚愕にセシリアは打ちのめされる。加えて親と言う言葉が彼女の胸を抉った。何故なら彼女も親の遺産を守らんと必死に努力してきたのだから

「聞こえてるんだろう！篠ノ之　束！！そして織斑千冬！！」

「一…夏…」

一夏が吼える。天をも轟かす程の怒りを孕んだ声で。それを耳にした千冬は信じられない程か細い呟きをする。たった一人の肉親に、大切な家族と思っていた少年に憎しみをぶつけられる姿は鬼教師と呼ばれているとは思えない程、小さく、目には生気が消えうせていた。

「聞いての通りだ！俺は貴様等を許さない！！爺ちゃんと父さん母さんを泣かせた貴様等を！！！」

その迫力に皆が圧倒される。野生の獣のごとく荒々しい気迫に当てられ誰もが身動きがとれない。

「だが一つだけ、そう、たった一つだけ貴様等に感謝をする事がある。」

「え・・・？」

その言葉に千冬の目に僅かだが生気が戻る。もしかしたらまだ姉弟に戻れるのではないかと淡い希望と共にーー勿論それはすぐ絶望へと変わるのだがーー

「貴様等の行いで悲しみにくれた爺ちゃん達、そしてそれをみて異常なまでの怒りに震えた俺に反応したんだ。たった一つ。実験継続の為に残しておいたコアが。その時のデータのおかげで滞ってた研究が全て進み、六年の歳月を経て当初以上の性能で完成したのさ。

…正真正銘、無限の力を持つ太陽エンジンとその力で蘇った爺ちゃんの兄弟…もう一人の正太郎が！！！」

言葉と共に一夏は古臭いデザインの操縦器を取り出す。それと同時に辺りに轟音が響き渡る。だが、その轟音にまぎり途切れ途切れに獣の吼えるような声が聞こえてくる

「さあ、見るが良い！！」

ガ・・・ォ・・・途切れ途切れの咆哮が段々とはっきりしてくる。

「戦争の名の下に生み出され、戦争の名の元に二度死んだ者を！！」

アリーナ上空に青い点が見えそれがどんどん大きくなっていく。

「我が祖父と同じ名を持つ家族を！！」

アリーナに巡らされたシールドをまるで紙のように引き裂き大地に降り立つ

その名を！

「不死身の兵士と呼ばれた彼を！」

その名を！
「日本の礎となり水底深く沈んだ彼を！」
その名を！
「最後の最後まで兄弟を守ろうとした漢を！」
その名を！
「戦争の罪を一身にその身に背負った漢を！」
その名を！
「鉄人２８号…またの名を正太郎！！」
・・・
金田一夏は吼える。この歪んだ世界を壊そうと。そして思う。これこそが自分達の贖罪であり、断罪でもあるのだと。その彼の熱き血潮を受け、鉄人も吼える。血は流れずともこの身体には同じ想いが、魂が篭っているのだと。ゆえに彼もまた吼えるのだ。

ガオオォォォォォォォ！！！！
自分の魂の命ずるままに。

第一話　蘇る不死身の兵士（後書き）

鉄人登場。しかしいくら今川とはいえ一夏を超人にしすぎたかも
唯でさえ超人濃度低めな鉄人なのに
一応全世界に喧嘩を売る上、鉄人のシステム上操縦者狙われたら終わりという
事で強化したのですけどなんか書いてる内にドンドン強くなっちゃったんですよね
しかし文章で動きを表現するのがここまで難しいとは参りました。
やたら説明臭くなってますし。
次回からは白騎士以前まで遡って生い立ちを明らかにしていこうと思ってます。
何故一夏が両親と面識がはっきりしてるのかはその時に。

第二話　親と子（前書き）

この話だと一夏も千冬も両親には捨てられてません。
なので忙しい親という形に致しました。

第二話　親と子

ー時は１０年程前まで遡る。ー

俺の両親は、工場に勤める傍ら発明・研究を行う。科学者だった。
本人達曰く、自分が研究をやりたいからやるだけで言って見れば趣味であり、だからその為と生活費を
稼ぐ為に働いていると話してくれた。
　そんな訳で忙しい両親達だったが、休みの日は極力時間を取って
自分達と遊んでくれたし
近くに両親の友人とその娘である篠ノ之親子が遊び相手になってくれたので寂しさを感じた事はなかった。
ーただ、どうしても留守にしがちな事もあってか千冬…姉さんは「自分が一夏を守らなければならない」と
思っていたらしいがー

俺は毎日箒と遊んだり剣道の稽古をして、偶の休みには爺ちゃんの所へ遊びに行ったりもした。
遊びに行くと爺ちゃんはいつも喜んでくれた。
なんでそんなに喜んでくれるのかと聞いた俺に爺ちゃんは笑って、
でもどこか真剣な表情で言った。
未来を生む子供は宝だと。そして自分の子がまた新たな
未来を作っていく様が楽しみでしょうがないと。
当時はよく解らなかったが、なんとなく

「ボクたちが、おとなになるのがたのしみなの？」

と聞くと

「ああ、楽しみさ。将来どんな事をするのか、どんな未来や夢を実現させるか」

と応えてくれた。子供ながらに爺ちゃんが期待してくれてくれたのが解り嬉しかった。
だから、

「ゆめ？じゃあおとなになったらじいちゃんがおったまげるくらいすごいことしちゃう！」
「はは、おったまげるか！それは楽しみじゃのう。生きる楽しみが増えるわい！」
「じゃあぜったいながいきしてよね！！ボクが大人になってでっかいことやって、それでけっこんして
　こどもができたら、またおなじおはなししてあげてよ！」
「一夏の子供か！ひ孫抱くとはどうやら百まで死ねそうにないな。ハハッ！」
「ぜったいだよ！ぜったいおはなししてよ！」
「ああ、約束しようの。ほら」

子供ながらに将来に凄い事して、大好きな爺ちゃんをびっくりさせようと思いながらその誓い…指きりを
爺ちゃんとしたのだった。

ーー将来、それが意外な形で果たされるとは思いもせずに。ーー

ある日、偶々箒達が用事があって遊べず公園で他の子供に混じって遊んでいた時、ふと視線を感じた。なんとなく見てみると
白衣の薄ぼんやりした初老の男が優しげに自分を見て微笑んでいたのだ。
どこか見覚えのあるその男の事が気になった俺はふと近づいて行く

とゆっくりと男は遠ざかる。いや、遠ざかっているという
より案内しているようにゆっくりと歩んで行く。
子供の誘拐は好ましい事でもないが割と多い事であり、当然両親も
自分達に「知らない人に付いて行ってはならない」
と耳にタコが出来るくらい言ってたし、自分も誘拐を恐れそれを十
分承知していた。
　なのにその男に付いて行く事に全く恐怖を感じなかった。漠然と、
けれどもハッキリとした感覚があったのだ

ーこの人は危険じゃないとー

どれほど歩いたのか解らない。ふと気づくと俺はどこかの研究所に
居て、男は消えた居た。さすがに見覚えのない場所に来て不安に
なっていると足音が近づいてきた。思わず身構えたがその足音の主
を見て安堵した。
その代わり相手は大いに驚いていた。何故なら相手は自分の両親で、
この場所は「危険だから入ってはならぬ」と言い聞かせられていた
祖父や両親の研究所なのだから。
一体どうやってと聞かれたので「なんか白い博士みたいな服着たお
じさんについて来た」と言ったが両親は首を捻った。
今日は来客はお前だけだと。他の誰も来ては居ないと。代わって怒
られた。偶々自分達の所だったとはいえ本当に連れ去られる事も
あるのだと。そうなったら命の危険もあると。

「でも父さん母さん、あの人悪い人そうには見えなかったし、全然
危険な感じしなかったし、それに…」
「でももストもない！今回は良かったものの殺される可能性だっ」
「爺ちゃんに似てたし、なんとなく。家族みたいな感じだった。」
「な！？」

自分の一言に両親は大層驚いたようであった。同時に何かに気づいたようでまさか、とか、いやそんな筈はとかしきりにブツブツ呟いている。どうしたものかと思っていると爺ちゃんが来た。何か考え事をしてるような顔で

「一夏、その男はこんな顔じゃなかったかの。」

そう言って古い白黒写真を見せる。随分年季が入っていたがそれでも人物像は識別できた。その中で長い鼻をした小太り気味初老の男性を
指差している。なるほど、確かにそこに移っていたのは自分が付いていった男である。そうだ、と応えると爺ちゃんがやはりといいたげに
奇妙な表情をした。困ったような、それでいて嬉しいような表情を

「爺ちゃん、この人って一体誰なの？」
「わしの父さん、つまりお前にとっては曾爺ちゃんじゃ」
「え！？でも曾爺ちゃんは爺ちゃんの生まれる前に死んだんじゃなかったの！？」
「いや、その通り。随分昔に死んどるよ。でも、夢に出た事があってのう。丁度千冬が生まれた頃じゃったか。
父さんの他に昔世話になった人たちが次々に立って孫が出来た祝いと、そして警告…気をつけるよう注意したんじゃ」
「注意？」
「ああ、孫には絶対に研究内容も研究所の場所も教えてもならんと。もし教えたらとても恐ろしい事がおきてしまうと」

その言葉に俺は戦慄を覚えた。何故なら自分はその恐ろしい事の条件を既に満たして居るのだから。もしやアレは曽祖父の振りをして自分を陥れた悪魔じゃないのかと本気で思う。そして恐怖する。ど

んな恐ろしい事が起こってしまうのかと。

「じゃ僕ここにきちゃあ…」

「慌てるな。これは千冬の時と言っておろうが。まだ続きがある。」

「続き？」

「そう、続きじゃ。一夏が生まれた時にも祝いに夢に出てきてな。今度の孫は大丈夫だと、お前達の夢を話しても大丈夫だと

但し自分からは話してはならない。お前が此処に来た時に話してやれと。千冬に秘密でな」

「千冬姉に秘密？大丈夫なのは良かったけどなんで？」

「多分もしこれを千冬が見たら間違いなく歪んだ道へ進んでしまうからじゃろうの。あの子は自分や力に溺れやすい面がある

からもしアレを見たら力に溺れてしまうかもしれんと…。」

「力に溺れる…どういうこと？泳ぐのでもないのに？」

「すまんすまん。一夏には難しかったかの。簡単に言えばロクでもない大人に育ってしまうということじゃ。孫をロクデナシになどしたくないからな」

「ふうん…」

「さあ、では見せてあげようか。ワシのこの５０年間、息子をも巻き込んだ夢の形を…来なさい一夏」

そう告げると爺ちゃんは俺の手を握って歩き出した。コツコツと足音が響く。やがて電気の光とは違う、暖かな、けれども力強い光が見えてくる。

近づくとやがて何かの機械の上にある小さな黒い球からそれが出ているのだと解る。

「爺ちゃん。あれ何？」

「見えてきたようじゃの。そう、あれこそが太陽エンジン！！太陽から無限の力を引き出す夢の動力源じゃ！！」

「でもそれ太陽電池と何が違うの？それにあれあんまり力が無いって言うけど」
「舐めるでない。いくら実験段階とはいえあれの倍の出力は等に出せておる…本来の目標からすれば微々たるものじゃが」
「本来の目標って？」
「一つで一国の電気エネルギー全てを作れるほどじゃ」
「……」

思わず絶句する。子供ながらにとんでもない話だと理解できる。でも同時に何故か心が惹かれた。夢物語のような事、でもそれを語る祖父と一緒に歩いて
居る両親の背中はどこか誇らしげで、頼もしく見えたから。そしてその夢も実現出来たらとても凄いと。
「でもそんな凄いもの作って一体どうするの？」
「昔は色々あっての。エネルギー問題がいつかは出てくるとおもってな。それに新エネルギーは父さん…曽爺ちゃんも夢みたいなものだった。それをかなえて見たいと…
まあ、一番の目的は彼、じゃな。」

その言葉と共に爺ちゃんはレバーを引く。すると下のほうから何かがせりあがってくる。黒く赤茶けた鉄の塊が。何かと思ったがその中に赤く輝く「眼」を見たとき
「ソレ」がなんの残骸なのか気づいた。
「じ、爺ちゃんこれってまさか…ロボット！？」
「その通り。太陽エンジンは彼の新たな心臓として開発したんじゃ。父さんが作った、ワシと同じ名を持つ兄弟…鉄人２８号を」
「鉄人…２８号？兄弟ってどういう事？」

その疑問に対し、爺ちゃんは丁寧に話してくれた。かつての戦争。それで一発逆転の為の無敵のロボット製造作戦があったと。その指

揮を執り、だけど戦争を最も嫌ったのが
父・・・金田博士だと。計画が難航する中自分の息子（つまりは祖父正太郎）が母子ともども戦死したと聞きその悲しみを埋める様に開発に没頭し、その２８番目の機体に
生まれてくる子の為にと考えた名…正太郎と名づけ有り余らんばかりの愛情を注いだのだと。
だが、同じく開発に携わっていたビッグファイア博士の策略に会い、彼の身体にはとんでもないものが埋め込まれてしまった。
新元素、バギュームにより絶大な力を発揮し爆発すれば以後６０年は地球を全生命が生存不可能な死の星にする禁断の兵器、太陽爆弾が埋め込まれたのだと。
その事に気づいた金田博士はわざと基地の場所を教え、鉄人と共に自らを葬った…筈であった。
そして戦死したと思われた子供、正太郎が１０歳の時、ちょっとした事件によって彼は遥か地の底から蘇ってしまった。最初は上手くいかない爺ちゃんとの関係も次第に合い
かけがえの無い家族となった時、事件は起こる。再びビッグファイア博士の手によって。
その解決には、完成した＝バギュームを搭載して本領発揮した鉄人が不可欠だった。でもそうなるといずれ爆発してしまう。それを防ぐ方法は溶鉱炉に溶かす事、
つまり完成と同時に彼の死を意味する事だった。追い込まれた状況の中遂に自らの手で兄弟を葬る事を爺ちゃんは決意した。いつかその罪を必ず償うと決めて。
その事件の最後、操縦機が壊れた時、鉄人が自分の方に向かってきた。そのとき自分を殺す気だと爺ちゃんは思った。彼にはその権利がある。それこそが
自分の罰なのだと。でも実際は彼は最後まで守ってくれた。灼熱の溶鉱炉からの燃える鉄からその身を持って。偶然なのかもしれない。でもそう思わずには爺ちゃんは

いられなかったと。そして思った彼が生きろと言うなら自分は生きて償おうと。もう彼のような悲劇を繰り返してはならないと
そして平和で、彼が兵器という悪魔の手先でなく、人々の幸せを作る正義の味方として大手を振って歩ける世の中になったら、今度こそ彼と家族として生きていこうと。
ゆえに決意したのだ。完全無公害で強力無比な無限のエネルギーの開発を。太陽爆弾という罪の塊ではなく日の下を大手に振って歩ける心臓を。
そう、太陽エンジンの開発を。

「爺ちゃんの…兄弟…。無敵のロボット」
「なあ。一夏。もし彼が蘇ったらどうしたい？」
「……遊びたい。」
「何？」
「だって爺ちゃんの兄弟なんでしょ？だったら一緒に遊びたいよ！それに家族なんでしょ！？」
「ハハ！そうか。遊びたいか！！そうかそうか！！成る程、父さん達の言葉の意味が、そして態々連れてきた意味が解った！！一夏がこういう奴だからか！！」

そう言って爺ちゃんは大声で笑い始める。両親もそれに釣られて大笑いしている。
首を捻る中父さんが俺に問いかける。

「なあ、一夏。鉄人は蘇った時最強の力を持つだろう。それで世界をどうにかしたいと思うか？」
「やだよ。それじゃ爺ちゃんが蘇らせた意味無いじゃん。第一それじゃ爺ちゃんが悲しむし、本当に強い奴は象さんみたいに優しいもん。力で無理やりするのっていじめっ子じゃん」
「…私達は良い息子を持ったわ。本当に。貴方がそういう子だった

からこそ、義爺様はここに貴方を連れて来たのね。」

「昔な、お前と同じくらいの時千冬に最強の力を持ったらどうするか聞いた事があっての。そうしたらあの子は王様に成りたいと。世界を自分の思い通りにしたいと言ってな。」

「家族はどうするの？って聞いたらあの子勿論守るよそんな凄い力が手に入ったんだしってね…その応え聞いたときは内心残念だったわ。」

「お母さん？王様は僕もどうかと思うけど家族を守るのはいけないことじゃないんじゃないの？」

俺は疑問を口にした。爺ちゃんが話した王様は子供にしてもさすがにどうかと思ったが「家族を守る」と言った母さんが暗い顔をしてたのが疑問だった。

少なくともそれは立派な事だと思うし、恐らくやがて生まれてくる家族を姉として守るという意味だと。それは姉としてむしろ誇る事ではないかと？

「一夏、もし友達が、箒ちゃんが虐められてたらどうする？お前は箒ちゃんより強いみたいだけど相手がもっと強くて敵いそうになかったら？」

「怖いけど、でも助けると思う。友達が虐められるのなんて見るのは嫌だし！」

「ボロボロで怪我だらけになって負けるかもしれないぞ？」

「でも嫌なもんは嫌だ！そんなのどうだって良いからとにかく助ける！！」

「……馬鹿な子ね。でもそれが聞きたかったわ」

「？それってどういうこと？」

「良く覚えて置きなさい一夏。『人を助ける時は馬鹿になって助けろ』って言ってね。助けたいと思ったらそれで充分助ける理由にな

るの。自分の立場がどうとか
相手がどうだとか見返りとか関係なくね。助けたいから助けた。それで良いの。」
「……似たような話を千冬にしたら、あいつは屁理屈つけて結局無視を決め込むみたいな事を言っててな。その後でその話をしたらあの答えだ。つまりアイツは自分より
弱い奴には強気も強気だが、一旦自分より強い相手には尻尾を巻いて逃げ出すって事だ。我が娘ながら恥ずかしい事に。勿論生き方としては無鉄砲は褒められたもの
じゃない。けど、壁に立ち向かおうともせず、力で全てを解決しようとするあの子には研究を教える訳にはいかなかった。知れば将来暴君…悪い王様になってしまうからな。」

「……それがさっき言ってた力に溺れるって奴？」
「そうよ。勿論あの子はまだ子供だし、勿論私達だって大切な娘をそんなものにする気はないわ。まあ、一度挫折を味わうなりすれば良いんだけど…」
「家事は下手だがそれ以外は完璧超人だからなアイツは」

両親の言うように、千冬は家事こそ致命的だがそれ以外は超人的レベルで優れており、挫折知らずの人生を今まで歩んでいた。勿論一応相応の努力はしてるが
それでも打ちひしがれたり、悔しがったりするような出来事なくほぼ思い通りに生きていた。恐らく彼女に挫折を叩き込むような事は今後もそうそうないだろう。
「良いか、一夏。本当に強い奴は転ばない奴じゃない。転んでもすぐ立ち直る奴だ。百回転んだら千回起き上がるくらいのな。」
「数が合わないよ？」
「そういう気合だって事よ。さあ、もう今日は帰りましょう。そろそろ戻らないとあの子が心配するわよ？」

ふと近くにあった時計を見るとなるほど、確かに5時近い。子供はそろそろ帰る時間だろう。帰り支度を始める両親を待っていた俺に爺ちゃんが声をかける。
「一夏。気が向いたらまた何時でもここに来て良いぞ」
「ホント？！でもいつも危ないって…」
「なに、ホントに危ない実験の時は来ないよう改めて言うし半分は千冬に知られないようにする為だからの。だから…」
「解った！千冬姉ちゃんには内緒だね！」
「その通り。だが、箒ちゃん達にも言っては駄目じゃぞ。」

笑みを浮かべながら爺ちゃんが俺の頭を撫でてくれる。その心地よさに任せているうちに両親が戻ってきた。両親について行くと妙な機械のある部屋に付き、それに
両親と乗る。
「熱き太陽に、無限の光と未来を託そう。いつか兄弟ともに暮らすその日の為に」

父がそう呟くと同時にバチバチと全身に静電気が走ったような妙な感覚があり、景色が一変していた。この景色は見覚えがある。爺ちゃんの家の倉庫だ。驚いて父に話すと

「こいつは転送装置さ。昔父さんが係わった事件で縁があってな。その人が死ぬときに譲り受けたものを改良したものさ。使うときはさっきの言葉が暗礁番号になってる。
最も声でも区別してるから、もし合言葉がばれても大丈夫なんだけどな。ちなみに俺達の他に箒ちゃん家のオジサンオバサンも知ってるぞ。古い付き合いだったし」
「あれ？じゃあどうしてボクこれたの？」
「爺ちゃんが、いや爺ちゃん達がなにかやったのかもな。なんせ死

んだ人間だ。この世の理なんて意味無いだろうさ」
「ようするにひい爺ちゃんがあの世パワーでなんとかしたってこと？」
「まあ、そういう事ね。さあ、帰りましょう。一夏、折角だから何かお菓子でも買っていく？」
「良いの？！やった！」

父さんと母さんに手をつながれながら帰って行く。
爺ちゃん達の夢を感じられて、そして自分よりいつも先を行っていた姉でも知らない秘密を知っているというちょっぴり優越感に浸って。
その後家に帰ると怪訝な顔した姉さんが出迎えてくれた。何故両親と一緒なのかと疑問に話す姉には帰り道偶然会ってどうせだから一緒に帰ったと告げる。
特に不自然ではなかったしお土産のお菓子で気を良くした姉はそれ以上追及しなかった。
その日の夕食は何故か何時もより美味しく感じた。良いことがあると御飯が進むというからもしかしたらそうだったのかも知れないこんな日が、いつまでも続けば良いと思った。

ーーしかし、その願いは虚しく壊される。両親達の願いも虚しく力に溺れた、自分が姉と慕った二人の人物によってーー

第二話　親と子（後書き）

結構難産でした。
最初は一夏だけ面識ありにしようかと思いましたが、幾らなんでも
不自然過ぎる
上無責任過ぎるという事でこういう形にしました
ちなみに力云々は白騎士事件等で感じた千冬への感想です。そんな
事しでかすのが
誰だか解っていて自分の手で世界滅茶苦茶にしてるのにそのブッ壊
したもの
を広める活動をしてる事に対してとかの。
大体あんた親友警戒してるがあんたも充分同罪だと。
しかし歳取った正太郎がなんだかオリキャラっぽくなってしまった
のが残念。
やはり既存キャラに年齢取らせるのは難しいですわ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7330y/

蘇る戦争の亡霊

2011年11月23日20時54分発行